

13) トベラ＝海桐花

トベラはトベラ科の常緑低木で暖地の海岸地帯に普通に見られ、時には群落をつくることもある。高さ3～5mに達し、関東から九州の海岸地帯の砂地などに多く、アジアの亜熱帯方面にも分布する。トベラの仲間はオーストラリアにも8属があり、これはオーストラリアの固定種で他には分布しないものの、トベラ属はアジアから太平洋に広く自生する。学名は『*Pittosporum tobira*』で、属名は「黒い種子」のことで、種小辞は「扉」を意味している。

トベラの葉は長楕円形の明るい緑色で長さ5～8cmほどである。葉には悪臭があるために、節分や除夜にこの木を門扉にさして魔除けに用いた。これを『扉の木』といい、これが訛ってトベラになった。別名を『トビラノキ』というのはこのためである。トベラを『オコウジンギライ』などと呼ぶ地方もあって、『荒神』は『三宝荒神』（サンポウコウジン）のことで、これは「竈(かど)の神様」である。この木を竈で燃やすと悪臭が立ち込めて、竈の神様が嫌がるというところから名付けられた。この時代はトベラの小枝と、ボラの幼魚である『ナヨシ』の頭を門扉などに刺して、魔よけとすることが多かったが、この習俗は次第にトベラの代わりにヒイラギの小枝が用いられるようになった(05-03-06 ヒイラギの項参照)。当初はトベラとナヨシの悪臭で、鬼を退散させようと考えられていたものが、やがてヒイラギの刺で鬼の目を突き、ナヨシ(後世になるとイワシ)の悪臭で、鬼を退散させるという意味が込められるようになり、時代とともにトベラがヒイラギへと、ナヨシはイワシへと変化し、刺と臭気の二本立て、鬼を追い払おうという趣向に変わっていったのである。

トベラの葉には美しい艶があり初夏の頃には花序を出して、くちなしに似た芳香のある白い小さな5弁花を数個ずつ付ける。雌雄異株で雌株は秋になると固い球形の黒い果実をつけ、熟して3裂すると中から明るい赤色の粘り気のある種子を覗かせる。この粘り気のため鳥のクチバシや身体について種子は遠くまで運ばれる仕組みになっている。このため内陸部で自然発生していることも少なくない。しかしもともとは海岸照葉樹林の代表種で、乾燥にも病虫害にも強く、乾ききった砂浜などに群生しているのをしばしば見ることができる。最近では高速道路の分離帯や公園のグリーンベルト、庭木としても植えられることが多い。またトベラの葉の悪臭は虫除けになり、シラクモなどの寄生性の皮膚病には、葉を煎じて塗布すると良く、治療剤として用いられてきた。家畜の下痢止めとしての効果もあるという。しかしその一方ではトベラの葉にはトベラキジラミという昆虫類が大量に発生することも多い。これは人工的に植栽された公園や分離帯などの通風が悪いところで発生することが多く、海浜などでは余り見ることはない。この昆虫は甘露を分泌し、粘性があるために、これにさらにスス病菌が発生し、悪循環となることも少なくない。通風をよくしておくことが大切である。



トベラは東北地方南部から西の海岸付近に多く自生する植物で、韓国、中国南部、台湾にも分布する。花は香りが良く入れ替わり立ち代わり昆虫類が集まって来る(茨城県大洗海岸)。



トベラの果実。嵐山の公園にはたくさん植えられていた(京都市右京区嵐山東公園)。

[目次に戻る](#)